

## Passingにおける人種とセクシュアリティ

---

小林 美 香

---

### はじめに

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr.) が、演説 “I Have a Dream” で人種差別の根絶を訴えてから、2013年で50年の節目を迎えた。1776年にイギリス本国から独立し、今や世界を率いる先進国へと急成長を遂げたアメリカ合衆国であるが、長きに渡って続いた人種差別の過去は、その国の歴史に暗い影を落とす。アフリカとの奴隷貿易が行われた時代から続いた奴隷制は、1865年12月、アメリカ合衆国憲法第13条の修正によって終焉を迎えた。しかし、奴隷制度の廃止は、黒人差別の終焉を意味することはなく、南部ではジム・クロウ法が成立するなど<sup>1</sup>、以降100年近くに渡って黒人達<sup>2</sup>は社会的に迫害を受けてきた。ここでの「黒人」とは、1920年代当時、アメリカ社会で浸透していた「血の一滴の掟 (one-drop rule)」の基準によるものであり<sup>3</sup>、当時、黒人の血が混ざっている者は皆一様に差別の対象とされてきたのだ。

本論で取り上げる『パッシング』(Passing, 1929)の作者、ネラ・ラーセン (Nella Larsen 1891-1964) も、デンマーク生まれの白人の母と、西インド諸島出身の黒人の父との間に生まれた混血の女性である。ラーセンの両親は彼女が2歳の

時に離婚、後に母親は白人男性と再婚し、新たに2人の娘をもうけたことから、彼女は白人に囲まれた私生活を送ったという。フィスク大学の高等部に進学、今度は周囲のほとんどが黒人という環境で過ごすなど、彼女は白人と黒人、両方の人種と非常に近い関係があったといえる<sup>4</sup>。

彼女のように混血で、その外見が白人と変わらない人々の中には、当時の白人中心のアメリカ社会を生き抜くため、素性を隠し、白人として生活する道を選ぶ者もいた。この行為はパッシング (passing) と呼ばれ、20世紀初頭に「パッシング小説」と呼ばれるジャンルが登場したことからも、この行為は人々の関心の対象となっていたことが分かる。無論、ラーセンの小説『パッシング』のタイトルもこの行為を指すものであり、物語が「人種」をテーマにもっていることは明白であるが、この作品にもう一つのテーマが内包されていることは、多くの先行研究でも語られている。それは、「セクシュアリティ」である。デボラ・マクダウェル (Deborah McDowell) が、主人公のアイリーン・レッドフィールド (Irene Redfield) とクレア・ケンドリー (Clare Kendry) の間にレズビアン関係があると指摘したように (McDowell xxiii)、この作品には、登場人物、特に主人公アイリーンの同性愛的傾向を感じさせる箇所が多数ある。1920年代のアメリカは、ローリング・トゥエンティーズ (Roaring Twenties) と呼ばれるほど社会的変動が大きかった時代であり<sup>5</sup>、性的マイノリティに対する姿勢も、以前に比べて比較的寛容になっていた<sup>6</sup>。それは、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) が『エデンの園』 (*The Garden of Eden*) に女性同士の性愛を描き、クロード・マッケイ (Claude McKay) の『ハーレムへの帰郷』 (*Home to Harlem*) では同性愛に対するハーレムの様子が描かれたことなどからも明らかであると言える。このような社会的背景、また『パッシング』の舞台が、黒人レズビアンのサブカルチャーが早くから形成されたハーレムであることに鑑みるならば (フェダマン 84)、物語を「セクシュアリティ」の観点からも考察する必要があると考える。

以上の事情を念頭におきながら、本論では人種とセクシュアリティをテーマに、ネラ・ラーセンの小説『パッシング』についての考察を行う。1章では、1920年代のハーレムという物語の時代背景に言及しながら、アイリーンとクレア、それぞれの「人種アイデンティティ」を読み解く。続く2章では、アイリーン視点で表現されるクレアの描写や、二人の関係性、またアイリーンとその夫ブライアン (Brian) の家庭生活から、アイリーンに同性愛的傾向があることを論じ、物語に「セクシュアリティ」というテーマが内包されていることを述

べる。3章では、1章と2章で言及した人種・セクシュアリティという二つのテーマが、登場人物達の「階級」と密接に関わっていることを述べ、人種・セクシュアリティ・階級という三つの視点から、クレアの死という結末の真相と、結末のもつ意味について考察する。

## 1章 人種

### 1 ハーレム・ルネッサンスと黒人

物語の舞台は1927年アメリカ。この時代、ニューヨークのハーレムは、1920年代、黒人芸術が花開いたハーレム・ルネッサンス (Harlem Renaissance) の中心地であった。当時、黒人達は初めて自らの芸術文化を発信することとなり、音楽においては、黒人音楽が土台となっているジャズが栄え、20年代アメリカが「ジャズ・エイジ」と呼ばれるようになるほど彼らの社会的影響力は大きかった。そのような黒人達の活力ある時代において、作者ネラ・ラーセンもまた、1928年に彼女の自伝的小説である『流砂』(Quicksand)を、翌年には『パッシング』を発表するなど、時代の寵児であったと言っても過言ではない。ハーレム・ルネッサンスは、黒人が自らのアイデンティティを表現し始めた時代であるとしばしば語られるが、一方で、この黒人芸術運動は白人パトロンによって経済的に支えられていたものであることにも言及しなければならない。事実、『パッシング』の巻頭には、“FOR Carl Van Vechten AND Fania Marinoff”という記述があるが、このCarl Van Vechtenとは、まさにハーレム・ルネッサンス期の白人パトロンであり (Lori 119)、ラーセンの『流砂』の出版を助け、支援を行ったと言われている人物である (相田 43)。つまり、黒人芸術運動であるハーレム・ルネッサンス時代を築いたラーセンもまた、白人の助けを借りていた一員であり、自らのアイデンティティを確立しようにもやはり白人の手を借りなければならないというジレンマを、多くの黒人達と同様に抱いていたのではないだろうか。

このように、黒人達が自らのアイデンティティを模索したであろう時代、ラーセンは著作『流砂』、『パッシング』の両作で、黒人ではなく「混血」の人間を主人公に選んだ。これは、ラーセン自身が混血であるという、自伝的理由によるものだけということは、『流砂』に彼女自身の経歴が強く反映されていることから明らかである。しかし、混血の主人公の物語が彼女の作品発表以前から

アメリカ社会に存在していたなかで、彼女の作品は他の著者によるものと異なる視点を持っていることに注目したい。

ラーセンは、同じく混血のヒロインのパッシングを扱いながらも、フォーセット (= Jessie Redmon Fauset) とは若干アプローチの方向が異なる。フォーセットの場合は、主人公はいかに白人の世界に入り込むかに腐心し、作者はそのことの愚かしさをアイロニカルに描きだすのだが、ラーセンの場合は、主人公たちに白人の世界と黒人の世界を行き来させることによって生じる不安やサスペンス、葛藤などを描くことが主眼となっている。(山下「ネラ・ラーセン」[2000] 165)

という指摘があるように、『パッシング』においても、パッシングをしているクレアや、パッシングをせずに黒人社会を生きるアイリーンのアイデンティティの揺らぎが主に描かれ、彼女達の心情がストーリー展開の要となっているのだ。

この時代、フォーセットを始め、混血の者だけでなく純血の黒人も、混血の人物を主人公にもつ物語を多く書いたことは注目すべき点であると言え、彼女の作品出版前からアメリカ社会で読まれた『元黒人の自伝』(*The Autobiography of an Ex-colored Man*) も、黒人であるジェームズ・ウェルダン・ジョンソン (James Weldon Johnson) による混血男性の物語である。黒人作家が、あえて混血の人間を主人公にもつ作品を書いたのはなぜか。それは、彼ら黒人が常に意識せざるを得なかった白か、黒か、という問題を、両人種の狭間に位置すると言える混血の人間こそが、最も客観的にとらえ、伝えることのできる人種であると考えたからではないだろうか。ハーレム・ルネッサンスの時代は、黒人達のアイデンティティが確立され始めた時代であり、かつ自分たちが「白人を意識せざるを得ない人種」であるという意識を強めた時代であると言える。そのような時代だからこそ、客観的かつリアルに、黒人の「アイデンティティの揺らぎ」を描いた『パッシング』が、今日まで多くの読者を得る作品となっているのだと考える。

## 2 アイリーンのアイデンティティ

『パッシング』のストーリーは、第三者の語り手によって、アイリーンの視

点で展開されていく。アイリーンは、パッシングする道を選ばなかった人物で、一度もパッシングすることを考えたことがないと言うほど (Larsen, *Passing* 19)<sup>7</sup>、「人種への本能的な忠誠」(P 80) を持った人物である。そのため、パスしている友人クレアについて“Clare did not run that strain of black blood” (48) と考え、“Nor could it be said that she had even the slight artistic or sociological interest in the race that some members of other races displayed. She hadn't. No, Clare Kendry cared nothing for the race. She only belonged to it” (38) と評すなど、友人の人種コミュニティへの忠誠心の低さを指摘する。

しかし、物語冒頭、彼女は白人しか入ることのできないドレイトンホテルに入るため、一時的にパスし、白人になります。“I don't believe I've ever gone native in my life except for the sake of convenience, restaurants, theatre tickets, and things like that” (79) という台詞からも、彼女はこの時だけでなく日常的にパッシングをしていたと考えられる。

ドレイトンホテルの場面で、彼女は、“Suppose the woman did know or suspect her race. She couldn't prove it” (8) と、素性が露見することへの不安に駆られながらも、一時的なパッシングに対しては罪悪感を覚えている様子はない。また、パッシングをする友人クレアに対して彼女はしばしば警告を発するが、その理由は、パッシングは“risky” (33) であるということばかりであり、クレアの人種コミュニティへの意識の低さを述べながらも、人種への背反行為であることを理由にクレアのパッシングを咎めるようなことはしていない。“It's funny about 'passing.' We disapprove of it and at the same time condone it. It excites our contempt and yet we rather admire it. We shy away from it with an odd kind of revulsion, but we protect it” (42) と、アイリーン自らが話すように、彼女にはパッシングを認めている側面もあるのだ。事実、黒人達は、パッシングをする他の黒人を守る風習があったということからも (Cayton and Drake 167)、彼女はこの一時的なパッシング行為を、完全なる人種への裏切り行為とは考えていないことが分かる。つまり、彼女がパッシングに反対する理由は、結局のところ自らの安全と同胞の安全、いわば「黒人の安全」を守るためであり、人種そのものへの忠誠心によるものではないと考えられる。

この「安全」へのアイリーンの考えは非常に強く、彼女は安全や無事であることが極めて重要であると考えている人物であり (P 51)、“Irene didn't like changes, particularly changes that affected the smooth routine of her household” (44) と表現されている。夫ブライアンのブラジル行きを止めようとするのも、

その希望は、安心感や永続性を彼女の生活から奪ってしまうものであるからであり (P43)、夫の変化への欲望を “she was wholly unable to grasp” (46) ととらえていることから、アイリーンの安全や不変への強いこだわりが感じられる。彼女がそれほどまでに安定した人生を望むのはなぜか。その理由として、一つに、彼女はどれほど肌の色や外見が白人と変わらない、いわばパス可能な人物であっても、その行為は必ずや白日のもとに晒されてしまうと考えていることが挙げられる。彼女は、白人はパスしている黒人を見分けられるわけがないと話しながらも (P7)、クレアの素性がジャックに露見してしまうことを危惧し、“What if Bellew should divorce Clare? Could he? There was the Rhinelander case” (81) と、ラインランダーの一件を心に浮かべる。ラインランダーの件とは、1920年代、ニューヨークにおいて妻が夫に人種を欺いていたとして夫側が訴えを起こした、ラインランダー夫妻の裁判のことを指している。その裁判においては「夫は妻が白人でないことを本当に知らなかったのか」という点が議論となったが、その際妻は法廷で自らの上半身と足を晒すことで、人種はその身体に読解可能であるということを示したことがあったという (庄司 22-23)。

ラインランダー裁判に現れたこうした人種観——衣服や言語によって人種をパフォーマンスすることはできても結局人種は身体に顕現しそれは視覚的に読解可能なものだという考え——は、ラーセンの『パッシング』の人種を考える上でのレファランスとなっているように思われる。(庄司 22)

という指摘があること、またアイリーン自身がクレアの瞳を見て “Ah! Surely! They were Negro eyes!” (20) と言っていることから、彼女が、人種とは、その身体や、“A thing that couldn't be registered” (61) と語る、外見以外の「何か」によって隠すことができないものである、という考えを無意識的に持っていることが明白であり、このことが、彼女がパッシングを危険であると見なし、パスしないことによる「安全な」生き方を選ぶ理由の一つになっていると言える。

また、彼女の「安全」への強烈な願望は、彼女が黒人という被差別側の人間でありながらも、その黒人コミュニティの中では、中産階級と言える階級に属していることにも由来すると考えられる。厳しい幼少時代を過ごしたクレアとは反対に、アイリーンの生活は幼少期から変わらず恵まれたものであり、彼女は医師である夫を持ち、二人のメイドを雇い、頻繁にパーティーに出かけるほどの経済力がある。彼女は時に自分よりも階級が下であると考えた人々のこ

とを見下すことがあり、それはメイドのズリーナ (Zulena) のことを “a small mahogany-coloured creature” (40 強調筆者) と表していることや、ドレイトンホテルの屋上で階下の人々を見ながら “how silly they looked” (5) と考えていることなどからも読み取れる。

しかし、「結局のところ、黒人の男女はその教育や芸術的達成とは無関係に、同じ立場のアメリカ白人よりたえず経済的に貧窮で、手ひどい扱いを受け、評価も低いというまぎれもないアメリカ的な現実は、ハーレムの生み出したすべての音や才能をもってしてもどうにも変えることができずに終わる」(ペイカー 37) という指摘があるように、どれほど黒人社会で裕福であり、それが 1920 年代という黒人の活力が強かった時代であっても、白人の存在によって、「アメリカ人」としての彼女の地位が白人と同等か、それ以上にはなり得ない当時の社会構造があった。それは、“‘I’m beginning to believe,’ she murmured, ‘that no one is ever completely happy, or free, or safe’” (52) という彼女の言葉にも表れているように感じられる。アイリーンのアイデンティティを考えるにあたっては、先行研究においても、しばしばハーレム・ルネッサンスの代表指導者であるデュボイス (W. E. B. Du Bois) が著書『黒人のたましい』(*The Souls of Black Folk*) において指摘した、“double consciousness” (Du Bois 11) の考えが挙げられているが<sup>8</sup>、デュボイスが「アメリカ人」と「黒人」という 2 つの自意識は並立できないものであると指摘したように、まさに黒人であるアイリーンもまた、白人という越えられない存在を前にアイデンティティの葛藤を起こしていると考えられる。それは、“She belonged in this land of rising towers. She was an American” (87) という一文にも示されているように感じられ、彼女は、アメリカに住む人間——つまり「アメリカ人」として、裕福な生活を送っている自分と、「黒人」という被差別人種に属し、白人と肩を並べることができない自分、という二つの自我の間で苦悩しているのではないだろうか。そのため、アイリーンは、自尊心を保つことができる自らの「階級」に依存し、変化のない、安定した人生を送る努力をすることで自我の崩壊を防ごうとしているのだと言えよう。

### 3 クレアのアイデンティティ

アイリーンと並んで物語の中核を担っているのが、クレア・ケンドリーだ。クレアは自分自身について、欲しいものを手に入れるためならどんなことでも

する人間で、そのためなら人を傷つけることも、何かを捨てることもあるのだと話す (P65)。彼女の生き方には“having way” (11) があると表現されるなど、自由奔放な女性として描かれている。

アイリーンと異なり、生活の厳しい幼少期を過ごしたクレアは、当時の自分自身について“You [Irene] had all the things I wanted and never had had. It made me all the more determined to get them, and others. Do you, can you understand what I felt?” (17) と話すなど、上昇志向の強さが伺える。白人の親戚に歓迎されなかった彼女はパスをすることで白人女性になりすまし、素性を隠したまま、国際銀行家のジョン・ベルー (John Bellevue) と駆け落ちをし、結婚する。そして、メイドを雇い、彼女がかつて望んだような裕福な生活を手に入れる。裕福な生活を送ってきたアイリーンと、貧しい幼少期を送ったクレアの人生は対照的であるが、「Clare にとって Irene は、パッシングすることによって、人種の壁だけでなく、階級の壁も越えるための一種のモデルだったのである」(相田 48) という指摘があるように、二人が物語において対等な関係で付き合っているように感じられるのは、クレアがパッシングによって階級の面でアイリーンに追いつくことが出来ているからであると言える。そのためクレアは、自分に利益をもたらしてくれるパッシングという行為への後ろめたさを感じさせる様子は少なく、パスすることは簡単なことなのに、なぜ他の友人はそれをしないのか疑問に思うとすら話す (P16)。

このように、クレアはパッシングによって裕福な生活を手に入れ、それに満足していたはずであった。しかし、クレアの心はパッシングによって完全に満たされることはなく、アイリーンの“The trouble with Clare was, not only that she wanted to have her cake and eat it too, but that she wanted to nibble at the cake of other folk as well” (38) という言葉が暗に示すように、クレアは黒人である時は白人の生活を望み、白人になった際には、更に黒人コミュニティをも求めるようになるのである。アイリーンの人種アイデンティティを語る上でデュボイスの「二重の自意識」の概念を挙げたが、クレアにおいても、二重の自意識が存在すると考えられる。まず彼女がもつ意識とは、「完璧な白人女性」としての自分である。「Clare の白人女性としての演技はあまりに完璧」(中地 23) という指摘があるように、彼女の白人性は、まるで女優の演技であるかのごとく隙がない。彼女は、アイリーンにとっては“selfish, wilful, and disturbing” (58) な人物であるが、それは黒人コミュニティにおけるクレアの姿であり、白人社会でのクレアは、美しく控えめな、まさにステレオタイプの

白人女性である。

An attractive-looking woman, was Irene's opinion, with those dark, almost black, eyes and that wide mouth like a scarlet flower against the ivory of her skin. Nice clothes too, just right for the weather, thin and cool without being mussy, as summer things were so apt to be. (6)

これはアイリーンがドレイトンホテルの屋上で休息をとる場面で、視線の先の女性がクレアであると感じていない時に、クレアの外見上の印象を述べるものである。アイリーンは彼女を“white” (8) であると思ひ込み、そこに疑念はない。外見だけでなく、その白人性は彼女の振る舞いにも見てとれるが、彼女の演じる「完璧な白人女性」は、結局のところ、黒人としての彼女が思う理想の白人の姿であり、それは、ハーレム・ルネッサンス期の minstrel show (minstrel show) が、「白人の思う黒人らしさ」を前面に表現した姿と裏返しに重なる。つまり、彼女の白人性は、その完璧さ故に、不自然さを含むのだ。アイリーンは彼女の自信に満ちた姿や、慇懃無礼な態度について “Clare, it gave Irene a little prick of satisfaction to recall, hadn't got that by passing herself off as white. She herself had always had it” (19) と話す。アイリーンは黒人としての視点でしかクレアを見ることができないことから、この言葉はクレアの白人性の真偽を的確にとらえているとは言い難い。クレアはパッシングによって得られた白人としての生活を守るべく白人らしさを身に纏うが、その不自然さはむしろ彼女の黒人性を示してしまっていると言えよう。

「完璧な白人女性」としての自我に加え、もう一つ彼女が持っている自意識とは何か。それは、「黒人としての自分」であろう。この意識は、“That time in Chicago” (3) という言葉で強調される、シカゴでのアイリーンとの再会から徐々に表れ始める。シカゴで、本来の人種である黒人の友人達と過ごしたことで黒人コミュニティの居心地の良さを思い出した彼女は、本来の人種への想いを強めることとなり、アイリーンに宛てた手紙の中では、“your way may be the wiser and infinitely happier one” (36) と述べ、幸せになるために一度は捨てた、黒人としての人生の方が幸せなのではないかと述べる。また、アイリーンの家を訪れた彼女は、“I've been so lonely since! You can't know. Not close to a single soul. Never anyone to really talk to” (52) と、自身の孤独を話す。ここでは soul という語が使われているが、この言葉は「黒人の魂、黒人の民族意識」

を想起させる言葉であることから、アイリーンに会いたいという願いに加え、暗に、白人社会で孤独な彼女の、黒人社会への欲望が示されているとも考えられる。それは、“You [Irene] don't know, you can't realize how I want to see Negroes, to be with them again, to talk with them, to hear them laugh” (56) という彼女の台詞にも表れていると考えられる。

アイリーンが「アメリカ人」と「黒人」という2つの意識の間で葛藤するように、クレアもまた、白人社会と黒人社会の両方を求めることによって、完成されたアイデンティティを構築することが出来ずにいるのである。完璧な白人を目指しても、そこには黒人性が出てしまい、黒人になろうにも、パッシングによって得られた社会的階級を失うことへの恐怖心がある。自らが望む人種へとパスしたことによって、皮肉にも更なるアイデンティティの揺らぎに悩まされた彼女は、友人アイリーンと同様、完全な幸せも、自由も、安全も得られず、白人社会と黒人社会を越境しながら自己を模索している人物であると考えられる。そのような完成されない自我を持つ彼女は、まさに「どこか孤独な子供」(P 58) であると言える。

## 2章 セクシュアリティ

### 1 アイリーンの同性愛的傾向——クレアとの関係

『パッシング』の第二のテーマとして挙げられる「セクシュアリティ」だが、その隠されたテーマの存在は、1986年にデボラ・マクダウェルが、主人公のアイリーンとクレアの間にはレズビアン関係があると指摘したことに代表される(McDowell xxiii)、その後も多くの先行研究で語られてきた。マクダウェルの指摘にあるようなアイリーンの同性愛的傾向は物語の随所に見られ、特にクレアへの描写において顕著に示されていると考えられる。アイリーンはことあるごとに“*She's really almost too good-looking*” (14)、“*she was stunning*” (73)、“*Clare, exquisite*” (58) など、クレアの外見を賞賛し、また、アイリーンは彼女の外見を次のように表現する。

Just as she'd always had that pale gold hair, which, unshorn still, was drawn loosely back from a broad brow, partly hidden by the small close hat. Her lips, painted a brilliant geranium-red, were sweet and sensitive and a

little obstinate. A tempting mouth. The face across the forehead and cheeks was a trifle too wide, but the ivory skin had a peculiar soft lustre. And the eyes were magnificent! dark, sometimes absolutely black, always luminous, and set in long, black lashes. Arresting eyes, slow and mesmeric, and with, for all their warmth, something withdrawn and secret about them. (19-20)

彼女の身体の美しさを部分ごとに述べる様子は、「伝統的に女性の身体を部分に還元するのは男性的なフェティッシュな欲望のレトリックである」(中地25)、という指摘があるように、女性が同性の外見を語るにはあまりに性的な印象を受ける。また、クレアの特徴や行動を示す表現においても、アイリーンのホモエロティックな視線が感じられる。彼女は“Into those eyes there came a smile and over Irene the sense of being petted and caressed”(20 強調筆者)、“Irene turned away from the caress of Clare’s smile”(55 強調筆者)と、直接の身体接触がない場面においても、クレアの視線、そして雰囲気によって「愛撫されている」感覚を覚えており、これは、クレアとの身体的接触を求めるアイリーンの性的願望の表れであるとも考えられる。同じように *caress* という表現が用いられている場面では“*At that moment it seemed a dreadful thing to think of never seeing Clare Kendry again. Standing there under the appeal, the caress, of her eyes, Irene had the desire, the hope, that this parting wouldn’t be the last*”(20)と、まるで恋人との別れを惜しむかのような感情を抱いている。更に、黒人と交際するという危険な行動をすべきでないというアイリーンの忠告に対するクレアの台詞には、“*You mean you don’t want me, ‘Rene?’*”(50)と、*need* を使わずにあえて *want* という語が用いられていることも注目すべき点であると言えよう。クレアの描写以外にも、アイリーンはフェリス・フリーランド (Felise Freeland) とダウンタウンに行く際も彼女と腕を組んで歩くなど (P 79)、アイリーンの同性愛的傾向は物語の随所に表れており、ラーセンが物語のテーマに「逸脱的なセクシュアリティ」を包含させたことは明らかであると考えられる。もし、物語を二人の同性愛的関係を考慮せずに読むならば、最終的に自分の夫との関係を疑う相手、いわば夫の不倫相手の美貌を、物語中首尾一貫して賞賛しているアイリーンの内面は不自然であると言え、本小説に包含されるアイリーンとクレアの同性愛的関係は偶然のものとは言い難い。

さらに物語中、アイリーンの言葉の中には聖書への否定的な考えを読み取ることができ、このことも、彼女のセクシュアリティを暗に示すもので

あるとも考えられる。彼女は、貧しかった幼少時代を聖書によって支えられたと話すクレアに対し、“how much unhappiness and downright cruelty are laid to the loving-kindness of the Lord? And always by His most ardent followers, it seems” (17) と語ったり、夫ブライアンが、ヒュー・ウェントワース (Hugh Wentworth) は自分を神だと思っているのではないかと話すと “If you remember what a low opinion he has of God, you won’t make such a silly mistake” (68) と強く反論したりするなど、Bible や God といった言葉に過敏に反応し、否定的な言葉を放っていることが分かる。この理由として、聖書の同性愛否定の概念が考えられる。同性愛否定に用いられてきた聖書の箇所は、「女と寝るように男と寝てはならない。それはいとうべきことである」(旧約聖書 レビ記 18 章 22 節)、「女と寝るように男と寝る者は、両者共にいとうべきことをしたのであり、必ず死刑に処せられる。彼らの行為は死罪に当たる」(旧約聖書 レビ記 20 章 13 節) 等が挙げられる。これらは男性同性愛者に関する記述であると考えられるが、ホモセクシュアルという広義でこれらを解釈するならば、アイリーンが同性愛的傾向を持つ者として神の教えに否定的な考えを持つことは自然であるとも考えられる。

このように、アイリーンの同性愛的傾向は、彼女とクレアの関係や聖書否定など、物語の随所に見受けられ、アイリーンの視点で展開される語り口に、彼女のセクシュアリティは強く反映されていると言えよう。

## 2 アイリーンの家庭生活——ブライアンとの関係

アイリーンの同性愛的傾向に関し言及すべきこととして、彼女には家庭生活のあることが挙げられる。アイリーンには医師である夫のブライアンがいるが、彼らの夫婦仲は理想的なものであるとは言い難い。アイリーン視点で語られるブライアンの行動は “his usual, slightly mocking tone” (42)、“Brian merely doffed his hat in that maddening polite way” (46) などと表現され、ブライアンの日常の振る舞いに対し嫌悪感を抱いていることが分かる。また、アイリーンがブライアンの容姿を “Brian, she was thinking, was extremely good-looking” と賞賛する箇所があるが、その視点は “looking with a sort of curious detachment” (39) と表現され、妻として夫の容姿を見ているものではなく、あくまで一般的な夫の外見への評価を述べているに過ぎない。むしろ、素晴らしい外見の持ち主であっても、クレアにとってそれは他人事のようなものであるという皮肉

にすら感じられる。同じく男性であるクレアの夫に対しても、彼の容姿や人当たりの良さを賞賛しつつも、“Irene had to concede that under other conditions she might have liked him” (31 強調筆者) と、love 等の恋愛感情を含む言葉が使用されていないことも、注目すべき点であると言えよう。

ブライアンのブラジル行きを懸念するアイリーンは、“she was afraid that he would throw everything aside and rush off to that remote place of his heart's desire. He wouldn't, she knew. He was fond of her, loved her, in his slightly undemonstrative way” (46) と、夫からの愛情表現の少なさを述べる。それでもアイリーンが二人の関係を自らに信じさせようとするのは、やはり、彼女が何よりも「安全」を重んじる人物であるからと考えられる。アイリーンは“We mothers are all responsible for the security and happiness of our children” (53 強調筆者) と、ここでも「安全」という言葉を持ち出しており、医師である夫によって保たれる、安全で裕福な生活を重んじる彼女は、同じように息子達の安全にも責任を感じているのだ。つまり、彼女の自尊心を保つ「裕福な家庭」の構成員である夫ブライアンや息子達との関係が悪化することは、彼女にとって望ましくないことなのであり、例え夫との夫婦関係が順調でなくとも、彼女は自らの生活の安全を保持すべく、息子達にも愛情を向けているのではないだろうか。

更に、ブライアンについても、彼の同性愛的傾向が先行研究においてしばしば語られている。ブライアンのブラジル移住という願望は、ブラジルが同性愛に寛容な国であるからだという指摘があるように (Blackmore 477)、物語に見られるブライアンの同性愛的傾向というのも否定できないものがある。彼は“If sex isn't a joke, what is it? And what is a joke?” (45) と話し、セックスがジョークであると子供に気づかせれば、その後の失望から逃れることができると言う。事実、アイリーンとブライアンは寝室を別にしており、夫婦関係の少なさが示唆されている。また、夫が女性患者を診ることも多い医師という職業であることについて尋ねられたアイリーンの“Brian doesn't care for ladies, especially sick ones” (31 強調筆者) という台詞も、ブライアンの女性への関心のなさをほのめかす、示唆的なものであると言えよう。

物語終盤、アイリーンはクレアとブライアンの関係を疑うようになるが、二人の関係を映し出すアイリーン目線の語り口に、第三者的な客観性はない。

この小説は全知の語り手によって語られているが、視点は専ら主人公の一

人アイリーンに制限されている。そのためこの小説は基本的にアイリーンの物語であり、彼女がいかに関界の出来ごとや（クレアを含む）人物を容し反応するかを描出することを主眼としている。つまり、読者はアイリーンの視点と価値観というスクリーンを通してこの物語を制限的に理解するという立場に置かれている。（山下「ネラ・ラーセン」[2005] 207-208）

という指摘があるように、物語の読者の感情は、アイリーンの語り口に左右され得るものであろう。そのため、家庭生活を重んじ、安定性に価値を置くアイリーンが夫と友人の関係を疑うような表現があったとしても、それはパニック状態にある彼女の被害妄想によるものであるとも考えられるのだ。事実、アイリーンが二人の関係を疑う自分を、以下のように冷静に結論づけることもある。

For, she reasoned, what was there, what had there been, to show that she was even half correct in her tormenting notion? Nothing. She had seen nothing, heard nothing. She had no facts or proofs. She was only making herself unutterably wretched by an unfounded suspicion. It had been a case of looking for trouble and finding it in good measure. Merely that. (76)

つまり、彼女は自分でもクレアとブライアンとの関係を疑う根拠がないと分かりながらも、二人のあさがしをすることで疑惑を抱いているのだと述べている。そのため、後の“In a quick furtive glance she saw Clare clinging to Brian's other arm” (88) という場面も、彼女の精神的興奮による錯覚であるとも考えられ、それは二人の不義の証拠でも、ブライアンの同性愛的傾向を否定出来る証拠でもないと言える。また、ブライアンのセクシュアリティを考えるにあたっては、物語中頻繁に *queer* という単語が用いられていることにも注目したい。“Again and again, she uses the word *queer* in reference to her husband” (Blackmore 477) という指摘にもあるように、男性同性愛者を暗に示すこの言葉の多用は<sup>9</sup>、ブライアンのセクシュアリティと無関係であるとは言い難く、彼の同性愛的傾向は物語の随所に表れていると言えよう。

このように、クレアとブライアンどちらにおいても、物語の随所に同性愛的傾向が見受けられ、偶然とは言い難い多数のクイアな表現からも、作者ラーセンが本作のテーマに「逸脱的なセクシュアリティ」を内包させたことは明らかであると考える。ラーセンは、異性愛主義といえる社会の中で自らのセクシュ

アリティに悩む人間の姿を描くことによって、性的マイノリティに対する社会のあり方に疑問を投げかけたのではないだろうか。

### 3章 アイデンティティ

#### 1 社会的階級——人種とセクシュアリティとの関係

本論の1章と2章で確認した通り、作者ラーセンは『パッシング』に人種とセクシュアリティという二つのテーマを包含させたと考えるが、この二つの共通点として、次の指摘があるように、そのどちらも社会的に抑圧される存在であったことが挙げられる。

[W]hen Larsen wrote *Passing*, blackness and homosexuality were both held to be stigmas that disqualified the bearers of these labels from freedom from undue social burdens and equal protection under the Constitution. (Blackmer 55)

1920年代のアメリカ社会において、黒人達は物語中の“Jim Crowed sections” (54) という表記にも示されるジム・クロウ法等によって、社会的に人種差別を受けてきた。それは、

“Dad, why is it that they only lynch coloured people?” Ted asked.  
“Because they hate’em, son.” (82)

という父子の会話や、“somebody called Junior a dirty nigger” (83) というブライアンという言葉にも反映されていると考えられる。

また、性的マイノリティに対する社会の姿勢が以前に比べ寛容になっていたと言われる1920年代アメリカでも、ブロードウェイなどの大衆文化では、レズビアンはしばしば悪役として扱われ、道徳的に墮落した性格の持ち主として描かれたことなどからも（フェダマン 106）、同性愛者は、社会からはみ出し者扱いをされていたのだと考えられる。“Both *Quicksand* and *Passing* contemplate the inextricability of the racism and sexism which confront the black woman in her quest for a wholly integrated identity” (Wall 98) という考えがある

ように、作者ラーセンは、人種・セクシュアリティのどちらにおいても社会的に抑圧され、葛藤する人物の内面を、物語を通して描きたかったのではないだろうか。

また、この二つのテーマを語るにあたって、登場人物の「階級」というのは無視できないものである。アイリーンが黒人として生きる上で自らの階級に執着し、「安定」を何よりも重んじている姿勢が見受けられることについては1章で言及したが、そもそもアイリーンが結婚した理由には、当時の黒人レズビアンを取り巻く社会の風潮があったと考えられる。

1920年代のハーレムの黒人レズビアンの中には、同性愛に徹して女どうしでブッチ／フェムのカップルを組んで暮らす者もいたが、女と性関係を持つ女たちの多くは男と結婚していた。バイセクシュアルだったり、経済的理由で結婚する者もいたが、性意識に目覚めたハーレムの黒人コミュニティが同性愛に戸惑う中で、自分にふりかかる汚名を最小限にとどめるには、表向きの結婚も必要だったのだ。(フェダマン 86)

つまり、黒人であることに加えて同性愛的傾向のある彼女が、白人社会・異性愛主義社会を生き抜くには、形式的な結婚は不可欠なものだったのだと考えられる。更に、夫が中産階級であったことにより自尊心を保持しているであろうアイリーンだが、1920年代の黒人レズビアン・カルチャーは労働者階級やキャバレーなどの水商売との関係が深かったというフェダマンの研究に触れながら、レズビアニズムというものが、黒人女性においては、中産階級的な価値観と折り合わないものであったことを指摘する研究があるように(中地 26)、中産階級の女性としての彼女は、社会的地位を失わないためにも異性愛者を装った生活をしていたと考えられる。つまり、ブライアンとの家庭生活は、結婚によって得られる彼女自身の生活と階級のためのものであると言えよう。

「性と結婚制度と階級はハーレム・ルネッサンスにあっては、人種のイデオロギーにより強く結びついていったのである」(中地 27)という指摘があるように、この「人種・セクシュアリティ・階級」という三点は物語において密接に結びついていると考えられる。人種を偽ることで階級を得たクレア、そしてセクシュアリティを偽ることで階級を得たアイリーン。この二人を主人公にもつことを考えれば、物語における「パッシング」という行為の、新たな側面が見えてくるだろう。それは、『『肌の色が薄い黒人が白人になりすますこと』だ

けではなく、近年では、白人がアジア人や黒人に、あるいは男性が女性に、女性が男性に、ホモセクシュアルがヘテロセクシュアルに、といったように『なりすます』場合をすべて『パッシング』の概念でとらえようとする批評上の動きが顕著に見られる」(杉山 20) という指摘もあるように、『パッシング』の登場人物は、人種・セクシュアリティ・階級の全てにおいて、本来の自分とは異なるものになりすましているということである。つまり、作者ラーセンは、小説のタイトル「パッシング」に、人種をパスするという表向きの意味に加え、セクシュアリティ、そして階級のパッシングという三つの意味を包含させたのだと考えることが出来るのである。

## 2 結末の真相

人種的、性的マイノリティとして生きる人間の姿を描いたと考えられる本物語であるが、その結末は悲劇的かつ不明瞭なものである。最後に、本物語の最大の謎とも言える、「結末の真相」を考察していく。

物語は、クレアが窓から転落死して幕を閉じる。彼女の死が単なる事故死であったのか、誰かに突き落とされたのか、それとも自殺だったのか、明白には書かれていない。クレアの死の原因をめぐって、これまでも多くの研究がなされてきているが、その一つとして次の意見が挙げられる。

One of the central ambiguities of the text is the cause of Clare's death, which can be read alternately as an accident, caused by the shock of her husband's unmasking; a suicide; a murder at the hands of the enraged Bellew; or a murder at the hands of the jealous and paranoid Irene, who suspects that Clare is having an affair with her husband, Brian. (Lori 111-112)

その他の先行研究においても、彼女の死の原因に、事故・自殺・殺人という三つの可能性を見出すものは多いが、中でも最も有力であるのはアイリーンによる殺害であると考えられる。アイリーンがクレアとブライアンの関係を疑い始めて以降、アイリーン視点の物語には彼女の殺害の伏線と考えられる記述が多数あるのだ。その一つとして、アイリーンがパーティーの場面でカップを割ってしまうシーンがある。

There was a slight crash. On the floor at her feet lay the shattered cup. Dark stains dotted the bright rug. Spread. The chatter stopped. Went on. Before her, Zulena gathered up the white fragments. (74)

このカップは非常に暗示的であり、白いカップを「白い身体」、黒い飲み物を「黒人精神」と考えると、このカップとその中身が暗に示すものはクレアであると考えられ<sup>10</sup>、そのカップを落とす主体がアイリーンであるというのは、アイリーンによるクレア殺害という結末の真相を暗に示しているように感じられる。この場面で、アイリーンはヒューに押されてカップを落としたことを完全に否定しているが (P 75)、カップが手から落ちた瞬間のことは書かれておらず、カップが割れる音で初めてその事実を知るこの場面は、クレア転落の場面で “What happened next, Irene Redfield never afterwards allowed herself to remember. Never clearly” (91) と、彼女がその瞬間のことを思い出せない様子と重なる。さらに、アイリーンはそのカップを “It was the ugliest thing” と言い、“I’ve never figured out a way of getting rid of it until about five minutes ago. I had an inspiration. I had only to break it, and I was rid of it for ever. So simple! And I’d never thought of it before” (75) と語るなど、一つのカップに関して異様に長い説明をしていることは不自然であり、「ただ壊してしまえばいいのだと閃いた」という内容は、アイリーンのクレア殺害の意思を暗示しているようにも考えられる。

その他にも、クレアとブライアンを疑うアイリーンの描写には次のようなものがある。

Then came a thought which she tried to drive away. If Clare should die! Then— Oh, it was vile! To think, yes, to wish that! She felt faint and sick. But the thought stayed with her. She could not get rid of it. (81)

これは、まさにアイリーンのクレアに対する殺意を感じさせるものであると言える。この描写の直後、彼女は自らの考えを払拭するためか、泣くために枕に顔を埋めるが、そこでは涙は出ず、アイリーンの殺意が一瞬のものではないことを示しているようでもある。

また、クレアの死の直前には、“Mind if I open this window?” (89) と言い、数時間前まで雪が降っていたような寒空の日に、後にクレアがそこから転落し

たであろう窓を開ける。そして夫に素性が露見した危機的状況において笑みを浮かべたクレアに対して、アイリーンは、“It was that smile that maddened Irene. She ran across the room, her terror tinged with ferocity, and laid a hand on Clare’s bare arm. One thought possessed her. She couldn’t have Clare Kendry cast aside by Bellew. She couldn’t have her free” (89-91) と、クレアとブライアンの関係という私的な事情に思いを巡らせながらクレアの腕に手をかけていることは、アイリーンのクレア殺害を示唆している場面であると言え、同場面について「Clareに駆け寄った勢いと怒りの激しさを考えるとき、IreneがClareを突き落としたという可能性はかなり高い」（佐々木40）という意見があることから、アイリーンのクレア殺害説は有力であると考えられる。

それでも、彼女の死の原因が明白には描かれていないことから、クレアの死に関する他の説についても考える必要があるだろう。まず、クレアの「自殺説」については、クローディア・テイト (Claudia Tate) が、“she is utterly alone, and suicide is the ultimate escape from the humiliation that awaits her” (Tate 146) と指摘している。しかし、クレアは、もし夫に素性がばれた時はどうするのかと尋ねられた際、“I’d do what I want to do more than anything else right now. I’d come up here to live. Harlem, I mean. Then I’d be able to do as I please, when I please” (85) と発言しており、“Children aren’t everything” (64) と語るなど、アイリーンほど家庭を重んじていない様子の彼女が、夫に素性が露見し、その後起こりうるであろう離婚という結果に怯えて自殺するとは考えにくい。「クレアの死の解釈に関して、最も注目すべきことは、クレアが自殺したという可能性に、語り手がまったく言及していない点である。この小説の語り手は、自分自身の死の行為者であることを、クレアに許していないのである」（谷本108）という指摘があるように、物語は彼女の自殺について示唆する場面は全く見られず、その上でクレアの死を自殺と判断するのは困難であると考えられる。

次に事故説だが、物語ではラルフ・ヘイゼルトン (Ralph Hazelton) が“Fainted, I guess” (93) と、クレアは失神して転落したのだと話しており、この説は、一つの可能性として物語中にも明記されている。しかし、バルーに素性が露見した際のクレアの様子は、“Clare stood at the window, as composed as if everyone were not staring at her in curiosity and wonder, as if the whole structure of her life were not lying in fragments before her. She seemed unaware of any danger or uncaring. There was even a faint smile on her full, red lips, and in her shining eyes” (90) と描かれ、周囲の混乱の中でも一人落ち着いた態度をとっており、

彼女がパッシングの発覚や夫の怒号に驚愕し、気を失うとは考え難い。また、物語の結末部分には二つのパターンがあり、1929年出版の Alfred A. Knopf 社版の最後は、“Centuries after, she heard the strange man saying: ‘Death by misadventure, I’m inclined to believe. Let’s go up and have another look at that window’” (94) という文で終わっている。

「思いたい」(“inclined to believe”) は、アイリーンを含めたその場の人々の願望を代弁しているかのようだ。アイリーンの犯行と知りつつ、彼女をかばうという共犯的な空気が流れているようでもある。(大森 240)

という指摘があるように、この最後の場面は、結局のところクレアの転落が「事故」として処理されているが、その判断には疑問が残っていることを示している。

このように、自殺説と事故説は、クレアの置かれた状況から考えられる可能性の一つではあるが、そこにはアイリーンによる殺害説に勝るほどの説得力があるとは言い難い。クレアの死の直後にある “She was utterly weary, and she was violently staggered. But her thoughts reeled on. If only she could be as free of mental as she was of bodily vigour; could only put from her memory the vision of her hand on Clare’s arm!” (91) といった一節や、“What if Clare was not dead?” といった表現もアイリーンの犯行を示唆するものであると考えられ、何より “She had thought of nothing in that sudden moment of action” (92) という一文は、ブライアンとクレアの仲を疑ったアイリーンが、突発的にクレアを突き落したのだということを示していると言えよう。

### 3 クレアの死の意味

クレアの死の原因についてはアイリーンによる突発的な殺害であると仮定したが、では彼女の死が意味するものは何であろうか。本小説が人種、セクシュアリティ、そして階級をテーマとする社会的な作品であることを考慮すれば、物語の結末の意味するものが、単に「夫と友人の関係を疑った女の嫉妬」であるとするのは安直であろう。「クレアの死」をもって締めくくられる、本物語の結末が意味することを、物語のもつ「人種・セクシュアリティ・階級」という三つのテーマに即して考えていきたい。

まず、「人種」の視点から結末を考えると、クレアの死は「本来の人種に背いた罰」を意味すると解釈できる。この考えは、混血の主人公が悲劇的な結末を迎えるという、一種典型的な「悲劇のムラート」として本物語を解釈するものである。フェリスがパッシング行為を sin と表現していることから分かるように (P 80)、やはりパッシングは黒人コミュニティの間では crime (法律上の罪) ではないにせよ、sin (宗教・道徳上の罪) ではあると認識されているのだ。故に、完全にはパッシングをしない人生を選ぶ、人種に忠誠心の強いアイリーン視点で語られる本物語が、パッシングをした彼女を悪人として、死という結果を与えたと考えることも出来る。

更に、「人種」の視点から考える結末の意味には、もう一つの可能性を見出すことが出来る。クレアの死について当局の役人に話を聞かれたアイリーンは、クレアはただ転落し、誰にも止められなかったのだと主張する (P 94)。そして物語は、“Then, everything was dark” (94) と、彼女が気絶したであろうことを示す一文で締めくくられているが、ここで、黒人をイメージさせる dark という言葉が使われていることにも注目したい。“The (perhaps) final line, ‘Then everything was dark,’ also echoes the novel’s return to an overtly black community” (Young 641) という指摘があるように、結末部分は、単にクレアの気絶を示すだけでなく、クレアの死によって黒人社会が回復されたことを暗示しているのだと考えられる。実際、物語中に dark という言葉は多用されており、肌の黒さを dark と表現することはもちろんのこと、クレアのパッシングを“dark secret” (57) と表すなど、この言葉は物語において象徴的な単語であるとも言える。この言葉を用いた結末部分は、人種という運命に反する行いをする者を、死をもって黒人社会から追放することによる「黒人社会の秩序の回復」を、意味しているのだと言えよう。

次に、「セクシュアリティ」の視点で結末を考察する。アイリーンはクレアとブライアンとの関係を疑い、クレアを自分の人生から追い出したいと考えているため (P 78)、クレアの死はアイリーンの家庭生活を平穏なものにする望ましいものである。しかし、アイリーンの同性愛的傾向を考慮した上で彼女がクレアを殺害したと考えると、その行為は愛情の対象を消滅させるものであり、いささか不自然なものだ。それでも、1920年代のアメリカが、異性愛者ではないことを公言できるほどセクシュアル・マイノリティに寛容でなかったことを考えれば、彼女はその逸脱したセクシュアリティを強制的に終了させる道、つまり対象の抹消を選んだのだと考えられる。ここで注目したいのは、物語中

にしばしば「煙草」が登場することである。彼女はしばしば煙草を吸い、ガートルード (Gertrude) の容姿を軽蔑する際、それらの言葉に並べて “And she wasn't smoking” (25) と言っている。つまり、彼女にとって煙草とは魅力的な物であるのだ。その煙草が、クレアの死の直前にも出てくる。

It had stopped snowing some two or three hours back. The moon was just rising, and far behind the tall buildings a few stars were creeping out. Irene finished her cigarette and threw it out, watching the tiny spark drop slowly down to the white ground below. (89-90)

ここで彼女は煙草を捨てているが、アイリーンにとって魅力的な煙草に灯された、「美しい女性」という意味を持つ “spark” が<sup>11</sup>、白い地面に落ちていく、というのは非常に示唆的である。煙草と spark が、アイリーンの同性愛の対象、つまりクレアを示していて、白い地面は、spark が長くは留まれない場所——「白人社会」と、そこでの彼女の生命の短さを象徴していると解釈できる。ここで暗示されているように、クレアの死は、アイリーンにとっての性的欲望の対象の消滅、つまり同性愛の終焉を意味しているのだと言えよう。女性同士の性愛に寛容でない社会において、アイリーンが自らのセクシュアリティに悩み、対象の殺害という手段を用いて、性的欲望の抑圧を図ったというのは、十分に考えられる可能性であり、クレアの死（殺害）は、アイリーン自身による同性愛の強制的終焉を暗示しているのだと考えられる。

最後に、「階級」の視点からの解釈であるが、これについてはアイリーンとクレアが再会した場所、そしてクレアが転落する場所はどちらも「屋上」であるということに注目したい。二人の再会の場面における屋上がアイリーンの社会的階級を暗に示すものであると解釈するならば、屋上からの転落は、高い階級からの転落を想起させるものだ。実際、パッシングによって白人としての裕福な生活を得ていたクレアは、素性が露見したことによって「黒人に戻った」のだと考えることができ、転落死というクレアの最期は、白人中産階級からの転落を暗に示していると言えよう。

このように、物語の結末は人種・セクシュアリティ・階級という、物語に含まれるテーマ全ての結末を示すものであり、“Everything must be paid for” (26) というクレアの信ずる言葉は、皮肉にも彼女の死をもって証明されたと言うことが出来るだろう。

Sitting alone in the quiet living-room in the pleasant firelight, Irene Redfield wished, for the first time in her life, that she had not been born a Negro. For the first time she suffered and rebelled because she was unable to disregard the burden of race. It was, she cried silently, enough to suffer as a woman, an individual, on one's own account, without having to suffer for the race as well. It was a brutality, and undeserved. Surely, no other people so cursed as Ham's dark children. (78)

物語終盤にある、この短くも重い場面には、一人の人間として（階級）、女性として（セクシュアリティ）、そして黒人として（人種）、アイデンティティの構築に苦しむアイリーンの姿が描かれている。物語に内包される三つのテーマが複雑に絡み合い、悩まされる主人公の葛藤が見られるこの場面は、読者が『パッシング』の持つメッセージ性を考える上で見逃すことのできないものであろう。

クレアの死によって終わる物語の不明瞭な結末に関しては、賛否両論あるだろう。しかし、このような結末は多様な解釈の可能性を与えるものでもあり、そこには、上の場面に示されるような葛藤、そして物語の多様なテーマについて読者に考える機会を与えるという、作者ラーセンの意図が感じられる。ラーセンが読者に与えたこのメッセージを、我々は重く受け止め、『パッシング』に包含されたテーマについて、これからも考え続ける必要があるのではないだろうか。

## おわりに

ネラ・ラーセンは、1928年に出版した初作『流砂』、本論で取り上げた『パッシング』の両作が好評を博し、1930年には黒人女性として初めてグッゲンハイム奨学金を得た。しかし、三作目の短編「サンクチュアリ」(“Sanctuary”)は、盗作の疑いをかけられ、以後彼女の作品が世に出ることはなかった。盗作疑惑は結局のところ誤解だったわけだが、その疑惑によってか、はたまた夫との離婚が影響してか、彼女は再び筆をとることはなく、1964年に一人他界した。彼女は短く、また不本意であろう終え方をした作家人生ながらも、後の作家達に多大な影響を与えた人物として文学史上にその名を残し、デュボイスは『パッシング』を“best piece of fiction that Negro America has produced since

the heyday of Chesnutt”と評したという (Rogers iv)。また、「いかに遠回してアンビヴァレントであろうと、因習の殻を破って、黒人女性の“sexuality”を扱った Larsen はアメリカ黒人女性文学の伝統から一歩踏み出したパイオニアとして認められるべきであろう」(鈴木 147) という評価があるように、彼女は、人種問題はもちろんのこと、1929 年当時においては、まだ挑戦的なテーマであるとも言える「セクシュアリティ」の問題を社会に提起した作家としても、その功績は大きい。

『パッシング』が発表された 1920 年代から現在にかけて、アメリカ黒人を取り囲む環境は変化し続けている。1950-1960 年代の公民権運動においては自らの権利を訴え、2008 年にはアフリカ系の血を引くバラク・オバマ氏がアメリカ大統領に当選。2012 年には再選を果たすなど、未だ完全ではないとは言え、アメリカは確実に人種的平等の社会を構築してきている。しかし、平等社会を目指す過程においては、「アフーマティブ・アクション」に由来する諸問題が浮き彫りになるなど、新たな問題が生じていることも事実であり、そこには解決すべき課題が多数存在する。

また、セクシュアリティの問題においても、2000 年代以降はアメリカ合衆国の多数の州で同性婚が合法化されるなど、その変化は著しい。しかし、同性愛者への社会的偏見の強さは根強いことも事実であり、世界では同性愛を「犯罪」であるとしている国も存在する。人種、セクシュアリティ共に「ヘイトクライム」と呼ばれる特定の集団への犯罪のターゲットとなることもあり、これらマイノリティを取り巻く問題は日本においても、議論すべき目下の課題と言える。

「分離はすれども平等 (“Separate but equal”）」これは、1896 年、プレッシー対ファーガソン裁判で用いられた象徴的な言葉である<sup>12</sup>。人種差別に異議を唱えるため、勇敢な行動をとったプレッシーは、『パッシング』の登場人物であるアイリーン、クレア、そして作者ラーセンと同様「混血」であった。彼は裁判を起こし、敗訴という結果に終わるが、この事件は、当時のアメリカにおける「分離」の概念に一石を投じるものとなった。時代を経てあらゆる差別問題が解決され、また新たな差別問題が生まれるように、差別問題の存在しない時代などないのかも知れない。しかし、『パッシング』の作者ラーセンやプレッシーなど、そこに問題意識を持ち続ける人間が存在し、その意識を世間に提起する者がいる限り、社会は「平等」の実現に向け前進し続けることが出来るのではないだろうか。

## 注

- <sup>1</sup> アメリカ合衆国の、主に黒人に対する人種隔離制度。その他ジム・クロウ法については『歴史のなかの人種——アメリカが創り出す差異と多様性』（中條 125-130）に詳しい。
- <sup>2</sup> 本論文では、白人からの差別という観点で論を進めるため、アフリカ系アメリカ人のことを黒人と表す。
- <sup>3</sup> 『『一滴の血の掟』では、たとえ一滴たりとも『黒人の血』が入っていれば、その人物は黒人と見なされるようになった』（中條 40）。
- <sup>4</sup> 本論で述べる Nella Larsen の経歴は、“Introduction” *Passing* (Rogers iii-v)、「ネラ・ラーセン」『世界の黒人文学——アフリカ・カリブ・アメリカ』（山下 [2000] 164）を参考とした。
- <sup>5</sup> 1920年代アメリカ社会の様子は、君塚淳一『アメリカ 1920年代—ローリング・トゥエンティーズの光と影』に詳しい。
- <sup>6</sup> 1920年代アメリカ社会における同性愛事情については、『レズビアン の歴史』（フェダマン 71-107）に詳しい。
- <sup>7</sup> 以下、*Passing* からの引用は *P* と略し、本文中に頁数を記す。
- <sup>8</sup> Du Bois は、*The Souls of Black Folk* にて、“double-consciousness, this sense of always looking at one’s self through the eyes of others, of measuring one’s soul by the tape of a world that looks on in amused contempt and pity”について、“One ever feels his two-ness,—an American, a Negro; two souls, two thoughts, two unreconciled strivings; two warring ideals in one dark body, whose dogged strength alone keeps it from being torn asunder” (Du Bois 11) と説明。
- <sup>9</sup> queer のこの意味は、*The Oxford English Dictionary* に“Of a person (usu. man): homosexual”と記載有り。
- <sup>10</sup> この場面について、大森尚子は「白い茶碗に入っていたコーヒーは、鮮やかな絨毯に『黒い』“stain”（シミ）となる。クレアと『白い』茶碗を重ねて、結末のクレア転落の伏線と考えることも可能だ。“stain”という単語は示唆的である。本来、除去しにくい『シミ』という意味だが、『色素』もしくは『不名誉』『罪』といった意味もある。『人種差別主義者』のジョンと暮らすクレアは、バルー家の“stain”であり、アイリーン家の絨毯の“stain”となり最後には雪上の“stain”になってしまうのだ」(大森 239) という見解を示している。

- <sup>11</sup> sparkのこの意味は、*The Oxford English Dictionary*に“A woman of great beauty, elegance, or wit”と記載有り。
- <sup>12</sup> 1890年代、ホーマー・プレッシーという「8分の1黒人（Octoroon）」が、白人専用の鉄道の客車から移動することを拒否して逮捕された事件。彼の住むルイジアナ州では、法律によって全ての鉄道会社は、白人と黒人の席や車両を分けていた。逮捕後、プレッシーは訴訟を起こしたが、最終的に最高裁判所は、同州の法律が人種に関して「分離はすれども平等（separate but equal）」な施設の提供をしている限り、憲法修正第14条には違反しないとの解釈を下し、同州の人種隔離法を合憲とした。このプレッシー判決は、合衆国最高裁が黒人に対する差別を認めた判決として重要視されている。（中條 132-138）

### 引用文献

- Blackmer, Corinne E. “The Veils of the Law: Race and Sexuality in Nella Larsen’s *Passing*.” *College Literature* 22 (1995): 50-67. *JSTOR*. Web. 11 October 2013.
- Blackmore, David L. “‘That Unreasonable Restless Feeling’: The Homosexual Subtexts of Nella Larsen’s *Passing*.” *African American Review* 26 (1992): 475-484. *JSTOR*. Web. 13 November 2013.
- Cayton, Horace R. and St. Clair Drake. *Black Metropolis*. London: J. Cape, 1946. Print.
- Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. New York: W. W. Norton, 1999. Print.
- Larsen, Nella. *Passing*. New York: Dover, 2004. Print.
- . *Quicksand and Passing*. New Brunswick: Rutgers UP, 1986. Print.
- Lori, Harrison-Kahan. “Her ‘Nig’: Returning the Gaze of Nella Larsen’s ‘Passing.’” *Modern Language Studies* 32 (2002): 109-138. *JSTOR*. Web. 13 November 2013.
- McDowell, Deborah. “Introduction.” Larsen, *Quicksand and Passing*. New Brunswick: Rutgers UP, 1986. iv-xxxv. Print.
- Rogers, T. N. R. “Introduction.” Larsen, *Passing* iii-v. Print.
- Tate, Claudia. “A Problem of Interpretation.” *Black American Literature Forum* 14 (1980): 142-146. *JSTOR*. Web. 13 November 2013.
- Wall, Cheryl A. “Passing for What? Aspects of Identity in Nella Larsen’s Novels.” *Black American Literature Forum* 20 (1986): 97-111. *JSTOR*. Web. 11 October

2013.

Young, John K. "Teaching Texts Materially: The Ends of Nella Larsen's 'Passing.'" *College English* 66 (2004): 632-651. *JSTOR*. Web. 13 November 2013.

相田洋明「Nella Larsen の *Passing* 読解——人種と性と階級」『言語文化研究』第3号, 2008年, 41-51頁.

大森尚子「『白い黒人』の新しさ」『白い黒人』春風社, 2006年, 232-244頁.

君塚淳一『アメリカ1920年代——ローリング・トゥエンティーズの光と影』金星堂, 2004年.

佐々木真理「女性たちはクイアな時間の夢を見るか?—— Nella Larsen の3人の女性たち」『実践英文学』第64号, 2012年, 27-45頁.

庄司宏子「"One-drop rule"の現在——アメリカのパスシング小説」『成蹊英語英文学研究』第14号, 2010年, 15-28頁.

杉山直子「人種をこえる娘たち——トニ・モリソンの『パスシング』小説『レシタティブ』と『パラダイス』」『言語文化』第23号, 2006年, 19-33頁.

鈴木三喜男「書評Deborah E. McDowell編著*Quicksand and Passing*——Nella Larsen (Rutgers University Press, 1987)」『教養諸学研究』第86号, 1989年, 145-147頁.

『聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき』日本聖書協会, 1992年.

谷本千雅子「語り手が語るのをやめるとき—— Nella Larsen の *Passing* と Fae Myenne Ng の *Bone* における語りのレトリック」『言語文化論集』第28号, 2006年, 103-114頁.

中條献『歴史のなかの人種——アメリカが創り出す差異と多様性』北樹出版, 2004年.

中地幸「パスシングと人種のパフォーマティヴィティ—— Nella Larsen の *Passing* における身体をめぐる欲望と抑圧」『日本女子大学英米文学研究』第39号, 2004年, 19-33頁.

ベイカー, ヒューストン・A・ジュニア『モダニズムとハーレム・ルネッサンス——黒人文化とアメリカ』小林憲二訳, 未来社, 2006年.

フェダマン, リリアン『レズビアン史』富岡明美・原美奈子訳, 筑摩書房, 1996年.

山下昇「ネラ・ラーセン『パスシング』における人種・ジェンダー・セクシュアリティ」『境界』で読む英語文学——ジェンダー・ナラティブ・人種・家族, 現代英語文学研究会編, 開文社出版, 2005年, 203-223頁.

——「ネラ・ラーセン」『世界の黒人文学——アフリカ・カリブ・アメリカ』  
加藤恒彦他編，鷹書房弓プレス，2000年，164-167頁。

## Race and Sexuality in *Passing*

---

Mika Kobayashi

---

### **Abstract**

Nella Larsen's *Passing* was written in the times of the Harlem Renaissance, which is understood as an epoch-making movement in which black people developed their own culture. But, in fact, there were many difficulties for black people to live in American society in the 1920s. Irene Redfield, the protagonist of *Passing*, persists in her security or stability of life because she cannot help depending on her middle-class life in white-dominated society. This essay explains her racial conflicts by referring to the idea of "double consciousness," an idea introduced by W. E. B. Du Bois. In the novel, Clare Kendry, a friend of Irene's, who passes as white, is also troubled by her racial conflict between blackness and whiteness. She seems like a perfect white lady, but the perfection ironically reflects her blackness. She goes back and forth between black and white communities to construct her identity. She comes to be rather distressed about her racial instability as a result of her passing.

A close reading of the novel, moreover, shows that it subtly explores the theme of sexual ambiguities. Both Irene and her husband Brian seem to have homosex-

ual tendencies, so they might not be regarded as a completely heterosexual pair. Such a reading can be supported by the homoerotic description of Clare and the loveless married life of the Redfields.

*Passing*, then, inscribes racial as well as sexual conflicts of black women: these two themes seem to have close relationships with the problem of their social classes. Irene, who lives as a black, assumes a false sexuality to secure a steady and high class life. And Clare assumes a false race to obtain a high social status. From these points, the title of this novel "Passing" signifies the falsehoods of race, sexuality, and social class. In conclusion, this essay argues that Clare's death, the most cryptic incident in the novel, is caused by Irene's murderous intentions. It seems to encapsulate the three important themes of the novel: race, sexuality, and social class.